

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	王 皓月
論文題目	靈寶經の研究 —陸修静と靈寶經の關係を中心に—

### 審査要旨

本論文は劉宋の道士陸修静がその編纂に係わったとされる靈寶經を中心に研究するものである。

本論文の序論の「一、先行研究」において、従来の靈寶經研究を(一)靈寶經研究の発端、(二)靈寶經の作者と成立時期に関する研究、(三)靈寶經の思想の源流に関する研究、(四)靈寶經研究の教理と内容に関する研究、(五)陸修静と靈寶經の關係に関する研究、に分けて詳細に紹介しており、靈寶經の先行研究はほとんど網羅されている。「二、問題の所在」では『元始赤書真文經』と『人鳥五符』と道藏本『洞玄靈寶玉京山歩虚經』を研究対象とする理由が述べられており、「三、研究方法」では研究方法として思想史的研究法を用いることを具体的に述べている。序論の用意周到な叙述は、本論文が学問的に高い水準の研究であることを示唆している。

本論では『元始赤書真文經』と『人鳥五符』と『洞玄靈寶玉京山歩虚經』を三篇に分けて研究している。第一篇の『真文赤書』の研究では、第一章で道藏本『元始五老赤書玉篇真文天書經』の編纂の経緯を思想史的方法によって分析する。本書に見られる三天と六天の觀念・六月齋と十日齋の觀念・元始天尊の神格は劉宋の天師道の思想と經典に由来すると指摘し、この箇所劉宋の天師道の道士陸修静の「敷述」(敷演・撰述)があると推測する。第二章では秘篆文「靈寶五篇真文」を校正し、「靈寶五篇真文」は本来は、七七二字であるが、道藏本『太上洞玄靈寶赤書玉訣妙經』に載せる六六八字の積文は陸修静によって改竄されたものであるという。補論では、六月齋と十日齋を載せる『旨教經』が劉宋初期の423年頃に天師道によって編纂されたと推定する。

第二篇の『人鳥五符』の研究では、第一章で道藏本『玄覽人鳥山經図』と『雲笈七籤』卷八十に収める「元覽人鳥山形図」とを比較検討して、「元覽人鳥山形図」が『人鳥五符』の本来の人鳥山真形図であり、その成立年代は元嘉七年(430)から元嘉十二年(435)までの間であると推定する。また、『人鳥五符』には人鳥山真形図に関する内容以外に、『太上洞真經洞章符』に載せる生策五符の部分も存在していたと推測する。第二章では『人鳥五符』に見られる「人鳥山醮祭」の構造を分析して、「人鳥山醮祭」には伝統的な醮祭の儀式と劉宋の天師道が考案した齋法儀礼とが融合していると指摘する。発炉と復炉の儀式や三捻香の儀式、臣妾の称名位の儀式は天師道の齋法儀礼から撰取したものであり、存思や鳴鼓の儀式は南方の神仙道の儀式を取り入れたものであることを明らかにしている。また、南齊の天師道が編纂した『正一法文經護国醮海品』所載の「醮海神法」の儀礼は「人鳥山醮祭」を模倣したものであると指摘する。

『無上黄籙大齋立成儀』卷三十四や『靈寶無量度人上經大法』卷四十九において、命魔の儀式の出典を「靈寶五符人鳥經」と記しているところから、『人鳥五符』に命魔の儀式が含まれていたと推測し、第二篇補論で道教の齋法儀礼で用いられる命魔靈幡と命魔密呪の成立と展開を詳細に分析している。『無上秘要』卷五十六の太真中元齋品の齋法儀礼で初めて命魔靈幡が実際に用いられているが、それは旗ではなく、符であったと指摘する。命魔密呪は劉宋初期の天師道の齋法儀礼である自然齋法で初めて用いられたが、その後は百姓齋法や塗炭齋法でも用いられていると指摘する。

第三篇の『玉京山歩虚經』の研究では、第一章で道藏本『洞玄靈寶玉京山歩虚經』の成立した経緯を分析している。『洞玄靈寶玉京山歩虚經』は南朝本『太上説太上玄都玉京山經』に相当するが、『太上説太上玄都玉京山經』は当初は、『洞玄靈寶玉京山歩虚經』の玉京山に関する序の部分と「洞玄歩虚十首」とから成り、『太上説太上玄都玉京山經』が経名を『洞玄靈寶玉京山歩虚經』に変更した唐初の時期に、「太上智慧經讚」・「五真人頌」・「礼經三首呪」が仙公系靈寶經から、「太洞玄經玉京山訣」が上清經から編入された。また存思法の箇所は明の頃に道藏本に取り入れられた、と推測する。なお、「靈寶歩虚章」は元始系靈寶經の編

纂以前の成立と考えられるので、陸修静が「靈宝歩虚章」を作った可能性はないと推定する。

第二章では『洞玄靈宝玉京山歩虚経』に載せる「靈宝歩虚辞」について考察する。靈宝歩虚と上清経の歩罡や仏教の繞仏との関係を考察し、上清経の『太上飛行九晨玉経』では歩罡を行う時に三篇の「徘徊游行九晨羽章」を歌うが、「靈宝歩虚辞」はその影響を受けて作られたものと推測する。また靈宝歩虚での修行は佛教の繞仏に由来すると推測する。さらに梁末から唐初にかけての時期に成立した『洞玄靈宝丹水飛術運度小劫妙経』では、梵音(梵天音)で「靈宝歩虚辞」を唱えると記しているが、これは架空のものであり、実際に梵音(梵天音)が使用された形跡はないという。道教音楽では歌詞としての「靈宝歩虚辞」が重要な役割を果たしていると指摘する。補論では、葛洪の「枕中書」の真偽を論じて、「枕中書」に見える宇宙論の蓋天説が葛洪の宇宙論と合致しないので、偽書であると結論する。

本論文の考察は、先行研究を十分に検討して、妥当と思われる先人の研究成果を活用しながら進められている。その推定・推測・指摘・解明の方法は客観的実証性と論理的整合性を備えており、提示された見解はおおむね適切である。よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに相応しいものと判断する。

公開審査会開催日	2013年1月30日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	文学博士(早稲田大学)	小林 正美
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		吉原 浩人
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		森 由利亜